

エイジズムの関連因子についての文献検討

茅野久美

要 旨

本研究の目的は、日本のエイジズムに関する研究より、日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版を用いた分析から明らかにされたエイジズムに関連する因子を抽出し、エイジズム軽減のための示唆及び研究課題を明らかにすることである。エイジズムをキーワードとして、医学中央雑誌 Web 版を用いて検索した結果、13 文献が収集された。エイジズムに関連する因子としては、【性別】【高齢者との交流】【加齢に関する知識】【高齢者看護の教育】【身体拘束の意識】が挙げられ、高齢者との親しみのある交流や高齢者の生活体験・人生の歴史などの心理社会的な理解の促進によりエイジズムが軽減される可能性が示唆された。また、研究課題としては、研究対象者の約 6 割が看護学生で横断的研究が多かったことから、医療介護専門職を対象とした研究や縦断的な実証研究によりエイジズムと他の因子の因果関係等を明らかにすることでエイジズムの要因及びエイジズムが及ぼす影響を明らかにする必要がある。

キーワード： エイジズム 文献検討

I. はじめに

エイジズムとは「高齢であることを理由とする系統的なステレオタイプ化と差別の過程」と定義され¹⁾、高齢者を軽く見る、見下すなどのエイジズムは高齢者虐待を増加させる要因となると言われている²⁾。高齢者ケアに関わる専門職は、日常生活に加え、医療・介護の場において、様々な高齢者と接する中で、高齢者に対するイメージや価値観も、日々変化しているのではないだろうか。気付けば、目の前にいる高齢者に対し「きっとできないだろう」「転んだら危ない」等、援助する側の一方的な思い込みにより、高齢者のできる力を奪ったり、高齢者の意思をないがしろにしたり、高齢者のためにと考えた行動で、高齢者の権利を傷つけてしまう場面も少なくないと考える。専門職であっても、それぞれが自分の中に規範や思想、価値観の影響を受けエイジズムを持っているため、日ごろから、高齢者をどのように観ているのか振り返り、エイジズムに気付き、自覚することが重要となってくる³⁾。

現在のエイジズムに関する研究は、日本語版 Fraboni エイジズム測定尺度 (FSA) 短縮版⁴⁾ を用いて行われることが多く、FSA が開発される 2004 年までは、高齢者観の研究の中で否定的な側面をエイジズムと捉え分析がされてきた。高齢者観に関す

る研究では、老人観スケール⁵⁾ を用い児童が抱く老人観の測定により、高齢者との交流が多いほど肯定的な老人観を抱いている傾向が報告され、SD 法を用いた高齢者に対するイメージの研究では、青年期にある人が否定的なイメージを抱いていることが報告⁶⁾ されている。また、加齢に関する知識を測定する FAQ を用いた研究では、高齢者のイメージと FAQ が相関関係⁷⁾ にあり、加齢に関する知識が多いことが高齢者イメージを改善することが示唆されている。これまでの尺度は、高齢者に対する認知的側面を中心とした捉え方であり、差別的な感情成分を含めたエイジズムを定量化し、標準的に利用可能な尺度の必要性⁸⁾ が指摘され Fraboni らにより、Allport の偏見の定義をもとに、29 項目のエイジズム測定尺度 (FSA) が開発されている。そして、原田らは、日本でも、感情成分を含めたエイジズムの尺度の必要性があるとして、日本語版 FSA 短縮版を開発した⁴⁾。FSA は、高齢者の社会からの隔離と排除を支持する「嫌悪・差別」因子 (6 項目)、高齢者との接触を避ける「回避」因子 (5 項目)、ステレオタイプ化された見方である「誹謗」因子 (3 項目) の 3 因子 14 項目の質問から構成され、5 件法で調査、累積し尺度得点を算出し、得点が高いほどエイジズムが強いことを意味する尺度である。そ

して、開発された2004年を機に、FSAを用いたエイジズムを統計学的に分析した研究が増加し、エイジズムの関連因子も明らかにされてきている。

そこで、エイジズムは高齢者ケアの質に影響し、高齢者の権利を侵害する恐れもあることから、我が国のFSAを用いたエイジズムの研究で、どのような傾向が示されているのか、エイジズムの関連因子を整理し、エイジズム軽減のための示唆を得るとともに研究課題を明らかにすることを目的とし文献検討を行った。

II. 目的

日本におけるFSAを用いたエイジズムに関する研究より、エイジズムに関連する因子を抽出し、エイジズム軽減のための示唆、及び、研究課題を明らかにする。

III. 研究方法

1. データ収集方法

1) 医学中央雑誌 Web版を使用し、「エイジズム」をKey wordとし、FSAの開発が行われた2004以降の原著論文を検索し、43件の文献が抽出された(2019年1月)。

2) 43文献のタイトルと抄録を概観し、発表が重複している2文献を除き41文献をレビューの候補として収集した。収集した文献から、以下の条件を満たす13文献を分析対象文献として選定した。

(1) 日本語版Fraboniエイジズム測定尺度(FSA)短縮版を使用している。

(2) 信頼性の示された5件法で調査、累積し尺度得点を算出している文献とし、累積せず各質問項目の点数で分析している文献、逆転項目の調整をしていない文献、4件法で調査している文献は、分析対象から除外した。

2. 分析方法

収集された13文献をマトリックス方式⁹⁾にて分析を行った。

<レビューマトリックスの作成と文献レビューの手順>

1) 文献の整理：発行年により新しい年代順に文書フォルダを整理した。

2) レビューマトリックスの作成：表の列に、文献

の基本情報として「発行年、著者、標題、学術雑誌」「目的」「対象者」を作成し、研究の目的の視点から「エイジズムの定義」「研究デザイン」「分析方法」「結果」「考察と課題」の列を作成した。13文献を読み込み、レビューマトリックスに要約した。

3) 総括：作成したレビューマトリックスを用いて、エイジズムの定義(表2)、FSAの平均値(標準偏差)(表3)、エイジズムに関連する因子を抽出した(表1)。

4) エイジズムに関連する因子として抽出された項目は、類似したものをグルーピングしカテゴリ分けした。

IV. 結果

1. 文献の概要

1) エイジズムの定義(表2)

エイジズムの定義を記述していない文献は6文献(文献1, 6, 7, 8, 11, 12)見られ、Butlerの定義を引用している文献が4文献(文献3, 9, 10, 13)、残り3文献(文献2, 4, 5)はButlerの定義を参考に示されていた。なお、概念枠組みを示している研究はなかった。

2) 研究対象者(表1)

13文献中、看護学生を対象とした研究は8件(61.5%)、大学生が2件(15.4%)、高校生が1件(7.7%)、都市部若年男性が1件(7.7%)、看護師が1件(7.7%)であり、約6割の文献が看護学生を対象としていた。

3) 研究デザイン(表1)

13文献中、横断的研究が9文献(69.2%)、介入研究が4文献(30.8%)であった。介入は、いずれも看護学生を対象に、「高齢者とのふれあい交流(文献5)」「健康高齢者へのライフインタビュー(文献8)」「健康高齢者へのライフインタビュー後のグループワーク(文献7)」「高齢者看護学Iの履修(文献11)」であった。

2. エイジズムの実態

1) FSA尺度得点(表3)

FSAの平均値を示している文献は13文献中9文献(69.2%)で、4文献は、研究方法に、「累積し尺度得点を算出する」ことの記述はあるが、

表 1 対象文献の概要

番号	著者 発行年	テーマ	研究目的	研究対象	研究デザイン 分析方法	エイジズムに 関連する因子
1	坂井智明 2018	スポーツ系健康学系大学生が抱く高齢者のイメージ	スポーツ健康学部大学生が高齢者に対して抱いている認識を明らかにする	スポーツ系健康学系大学生 566名	横断研究 Mann-WhitneyU 検定 Kruskal-Wallis 検定	「女性」「高齢者との同居経験あり」「高齢者から世話になった頻度が多い」人に、エイジズムが弱い。
2	森野美由紀 2018	一般病棟における看護師の教育背景と高齢患者への身体拘束に対する認識との関係	一般病棟で働く看護師の背景と身体拘束に対する認識との関係を明らかにする	A 県下の介護型療養病棟や精神科病棟以外の一般病棟に勤務し、看護ケアを行っている看護師 402名	横断研究 重回帰分析	身体拘束認識尺度得点を従属変数とし、エイジズムが有意な正の関連を示した。
3	森幸弘 2017	看護学生のエイジズムと、生活背景・老年看護学臨地実習における体験との関連	4年次生の看護学生が抱くエイジズムの実態と、生活背景・老年看護学臨地実習での体験との関連を明らかにする	老年看護学臨地実習を終了した4年次生 84名	横断研究 Mann-WhitneyU 検定 Kruskal-Wallis 検定	実習中の体験で「受け持ち患者の話を傾聴できた」「大勢の高齢者の方とコミュニケーションをとれた」人の「差別」「回避」に負の関連があり、「受け持ち患者から拒否される場面があった」「誹謗」に正の関連があった。
4	吉田浩二 2017	看護学生のエイジズムに関する研究	看護学生のエイジズムの実態および学年別での傾向や高齢者との同居経験による関係を明らかにする	看護系大学の2年次生、3年次生、4年次生 200名	横断研究 Mann-WhitneyU 検定 一元配置分散分析	「高齢者との同居あり」の人に「誹謗」が有意に高い。
5	森幸弘 2017	看護大学生の高齢者に対するエイジズムとイメージの変化 チャレンジサイト活動による高齢者とのふれあい交流から	チャレンジサイトプロジェクトにおける高齢者とのふれあい交流前後での看護学生のエイジズムの変化を明らかにする	チャレンジサイト活動に参加した看護学生 9名	介入研究 t 検定	高齢者とのふれあい交流の前後で「誹謗」が有意な変化を示した。
6	石井国雄 2015	感染症脅威が日本における高齢者偏見に及ぼす影響の検討	感染症脅威が生じることで高齢者に対する偏見が強まるかを明らかにする	都内の心理学専攻の大学2年生 128名	横断研究 Bonferroni 検定	高齢者との同居経験がない場合に感染症脅威は高齢者偏見を強める。高齢者との同居経験がある場合には有意な差はなかった。

7	養原文子 2015	ライフインタビュー体験の共有がもたらす効果－高齢者イメージとエイジズムの観点からの考察－	ライフインタビュー前後の高齢者イメージやエイジズム変化、さらにグループワークを通しての変化を明らかにする	4年生大学看護学科2 回生60名	介入研究 Wilcoxonの符号付順位検定	ライフインタビュー前後、グループワーク前後での「回避」得点の改善が見られた。
8	養原文子 2014	高齢者理解を目的としたライフインタビューの効果－エイジズムをアウトカムとした学びの分析－	学生の学びのレポートより、インタビューにおける高齢者の強みの理解とエイジズム変化との関連を明らかにする	4年生大学看護学科2 回生60名	介入研究 コレスポンデンス分析	ライフインタビュー前後でFSA上昇群と減少群で、高齢者の【生活・人生】について学びを深めることがエイジズムを減少させる。
9	久木原博子 2013	青年期にある人のエイジズムに関連する要因	青年期の人がもつエイジズムと関連要因を検討する	F県南部の3校の高校生 82名	横断研究 Mann-WhitneyU検定 多重ロジスティック回帰分析	「ボランティア経験あり」「親しい高齢者がいる」人にエイジズムが弱い。
10	林綾乃 2011	第1学年と第4学年の比較による看護学生の高齢者に対するイメージと知識・理解、コミュニケーションの特徴	第1学年と第4学年の看護学生が高齢者に対して抱くイメージと知識・理解、高齢者とのコミュニケーション場面の特徴及び属性による相違を明らかにする	看護大学生第1学年76名、第4学年46名、合計122名	横断研究 χ^2 検定 t検定 一元配置分散分析 Bonferroni検定	「高齢者との同居経験」「高齢者との会話経験の頻度」の少ないものに「回避」「合計得点」が有意に高い。「高齢者から世話を受けた経験」「世話をした経験」のある人に「回避」「嫌悪」「合計得点」が有意に低い。
11	村田日出子 2008	看護学生のエイジズムに関する要因－老年看護学概論及び実習前後のエイジズムの変化－	看護学生の背景と学生のもつエイジズムの関連、及び老年看護学Iの学習や実習前後のエイジズムの変化を比較検討する	看護短期大学に在学する1年生74名	介入研究 t検定	「老年者との同居経験のない」「老年者の生活体験を聴いた経験のない」学生が有意にFSA尺度得点が有意に高い。「嫌悪・差別」が有意に高い。老年看護学I履修後、「回避」が有意に低下した。
12	高野真由美 2008	看護学生の背景による老年イメージ、知識、エイジズムの相違－FAQ、FSA、SD法を用いて－	学生の背景に関連するFSA、FAQ、イメージの相違を明らかにする	3年課程の看護教育機関に在学する2年生と3年生276名	横断研究 χ^2 検定 t検定	「老人から世話を受けた経験のある学生」「FSA」「差別」「回避」有意に低い。「老人との同居経験のある学生」「老人の世話をした経験のある学生」FSA有意に高い。
13	原田謙 2008	都市部の若年男性におけるエイジズムに関連する要因	都市部の若年男性におけるエイジズムに関連する要因を検討する	都市部に在住する25～39歳の男性 1,289名	横断研究 重回帰分析	「親しい高齢者親族数が少ない」「加齢に関する知識が乏しい」「生活満足度が低い」ものにエイジズムが強い。

結果には、エイジズムに関連する因子の分析結果のみで、FSA の平均値の記述はなかった。平均値を示している9文献のうち、看護学生を対象にした文献が7文献でありFSA 平均値は25.3～29.1の範囲を示していた。看護師を対象とした1文献のFSA 平均値は25.8、高校生を対象とした1文献のFSA 平均値は30.39、若年男性(25～39歳)のFSA 平均値は31.73であった。

2) エイジズムに関連する因子

13文献の結果より、エイジズムに関連する因子を整理し【性別】【高齢者との交流】【加齢に関する知識】【高齢者看護の教育】【身体拘束の意識】の5つのカテゴリに分類した。

(1) 性別

- ・看護学生を対象とした分析において、男性に比べて女性の方がエイジズム得点が有意に低い(エイジズムが弱い)という結果が示されていた(文献1)。

(2) 高齢者との交流

① 高齢者との同居

- ・高齢者との同居経験があるものにエイジズムの傾向が弱い(文献1、4、6、10、11)という結果と、高齢者との同居経験のある者にエイジズムの傾向が強い(文献12)と、相反する研究結果の報告が確認された。
- ・感染症の脅威を示された際、同居経験のない者にエイジズムが強く、同居経験のある者はエイジズムが弱いと、高齢者との接触が少ない者に病気を高齢者と関連付けエイジズムが強くなる傾向が報告されていた(文献6)。

② 高齢者とのコミュニケーション

- ・親しい高齢者がいる人のFSA 得点が有意に低く(文献9、13)、高齢者との会話頻度の少ない人の「回避」、FSA 得点が有意に高い(文献10)ことや高齢者から生活体験を聞いた経験の少ない学生にエイジズムが強い(文献11)ことが報告されていた。
- ・看護学生の実習体験の中で、「受け持ちの高齢者の話を傾聴できた学生」「大勢の高齢者とコミュニケーションが取れた学生」の「差

表2 エイジズムの定義

定義	番号
高齢であることを理由とする、人々に対する系統的なステレオタイプ化と差別のプロセス (Butler)	3, 9, 10, 13
高齢者に対する根深い偏見であり、また老人であるという理由で人々に対してなされる、体系的なステレオタイプ化および差別	2
高齢者に対する偏見と差別	4
高齢者に対して抱く否定的な偏見、もしくは差別	5
記述なし	1, 6, 7, 8, 11, 12

表3 FSA 尺度得点

番号	対象者 (人数)	FSA 平均値 (SD)	嫌悪・差別 平均値 (SD)	回避 平均値 (SD)	誹謗 平均値 (SD)	
2	看護師 (402)	25.8 (7.4)	記載なし	記載なし	記載なし	
3	看護大学4年生 (77)	記載なし	9.5 (3.0)	10.3 (4.1)	6.1 (2.6)	
4	看護大学2～4年生 (200)	26.5 (6.1)	9.0 (2.7)	10.5 (3.2)	5.8 (2.1)	
5	看護大学生 (9)	記載なし	前後	8.2 (2.9)	9.1 (4.0)	10.0 (2.3)
			前後	8.0 (1.9)	6.7 (1.8)	6.8 (1.2)
7	看護大学生 (48)	26.3 (7.55)	前後	9.4 (2.9)	10.35 (3.9)	6.5 (2.0)
			前後	25.3 (7.99)	9.6 (3.4)	9.51 (3.6)
9	高校生 (82)	30.39 (6.85)	11.56 (2.79)	11.90 (3.38)	6.93 (2.25)	
10	看護大学生 1学年 (76)	29.1 (7.2)	10.3 (3.2)	11.6 (3.8)	7.2 (2.0)	
	4学年 (46)	26.4 (6.0)	9.2 (2.5)	10.5 (2.9)	7.0 (2.0)	
11	看護短期大学1年生 (122)	前後	29.1 (7.5)	10.0 (3.2)	11.2 (3.7)	7.8 (2.3)
		前後	27.8 (6.3)	9.8 (3.0)	10.2 (3.2)	7.7 (2.1)
12	若年男性 (1,289)	31.73 (7.7)	10.24 (3.57)	13.18 (3.67)	8.32 (2.40)	

別」「回避」の得点が有意に低く、「受け持ちの患者から拒否される場面があった学生」の「誹謗」の得点が有意に高いことが報告されていた（文献3）。

③高齢者から世話を受けたことがある

- ・高齢者から世話をしてもらった経験がある学生のエイジズム得点が有意に低い（文献1、10、12）ことが報告されていた。

④高齢者の世話をしたことがある

- ・高齢者の世話をしたことがある学生はエイジズム得点が有意に低い（文献10）という結果と、高齢者の世話をしたことがある学生のエイジズム得点が有意に高い（文献12）と、相反する報告が確認された。

- ・ボランティア経験のある学生のエイジズム得点が低い（文献10）ことが示されていた。

(3) 加齢に関する知識

- ・加齢に関する知識（FAQ）が低いとFSA得点が高い（文献13）こと、高齢者の世話をした経験のある学生では、FAQが高く、FSA得点が高い（文献12）ことが報告されていた。

(4) 高齢者看護の教育

- ・健康高齢者へのライフインタビュー後エイジズムの改善があり（文献8）、さらにグループワークを通しての学びの共有後さらにエイジズムの改善があった（文献7）。

- ・「老年看護学Ⅰ」履修前後でのエイジズムの改善があった（文献11）。

- ・高齢者の喪失体験に関する知識が多いと、エイジズムが強くなり、ライフインタビューの中で【生活—人生】という2つのワードが類似する内容が高齢者から聴けた者はFSA得点が低下した（文献7）。

(5) 身体拘束の認識

- ・身体拘束の意識とエイジズムが正の関連（ $\beta = 0.18$ ）を示していた（文献2）。

V. 考察

1. エイジズムに関する研究の動向

エイジズムの定義は、Butlerによる定義を引用したものが多く、否定的なエイジズムに着目し研究されていた。Palmoreは、エイジズムを「ある年齢集団に対する否定的もしくは肯定的なあらゆる偏見と差別」と定義し¹⁰⁾、高齢者として優遇されること

もエイジズムとしてとらえている。しかし、現在のエイジズムの研究は否定的エイジズムの視点からの研究が中心であり、肯定的エイジズムについての現状や関連因子は不明である。

FSA尺度得点については、異なる研究結果の単純な比較はできないが、看護学生・看護師が最も低く、次に高校生、その次に若年男性の順にエイジズム得点が高くなっていった。このことは、看護学生及び看護師は、高齢者に対する正しい知識があることが関連しエイジズムが弱い傾向にあることが考えられた。

2. エイジズム軽減のための示唆

エイジズムに関連する因子として【性別】【高齢者との交流】【加齢に関する知識】の視点からエイジズム軽減の示唆を探る。

【性別】との関連については1件のみの報告であったが、女性より男性にエイジズムが強い傾向が示されていた¹¹⁾。厚生労働省（2019）の「高齢者虐待防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査」の結果、施設内高齢者虐待の虐待者には、男性が多いことが示されており¹²⁾傾向が類似していた。性別だけで、エイジズムの傾向を判断することはできないが、今後、性別による思考・判断・行動等の特徴とエイジズムの関連を分析することで、エイジズムに関連する調整可能な因子の抽出が得られる可能性があると考ええる。

【高齢者との交流】では、「高齢者との同居」^{11)~16)}「高齢者に世話を受けた経験」^{11) 14) 16)}「高齢者の世話をした経験」^{14) 16)}「親しい高齢者の存在」^{17) 18)}「高齢者と会話する経験」¹⁴⁾「高齢者から生活体験を聴いた経験」¹⁵⁾「ボランティア経験」¹⁷⁾にエイジズム得点の有意差が示されていた。

高齢者の同居に関しては、「同居経験のある者にエイジズムが強い傾向がある」^{11)~15)}と「同居経験のない者にエイジズムが強い傾向がある」¹⁶⁾と、相反する結果の報告があったことから、単に同居経験の有無の関連ではなく、身近な高齢者とどのような関りを持っていたか、その体験にどのように意味づけがなされているかが関連する因子として重要といえる。さらに、対象文献の研究対象者の多くが看護学生であったことから、学生（孫）と高齢者（祖父母）との交流状況は、複雑な家族背景や環境の違いの影響も受け、異なることを考慮し、関連因子の抽出を検討する必要がある。ただし、同居経験のな

い者に感染症の脅威が示された際に、エイジズムが強く示された結果が報告されることから、高齢者との接触経験の少ない場合には、高齢者を病気と関連付けやすい傾向があり、偏見が生じる可能性があると考え¹³⁾。

「親しい高齢者の存在」¹⁷⁾ ¹⁸⁾ や「高齢者と会話する頻度が多いこと」¹⁴⁾ 「高齢者から生活体験の話を聴く経験がある者」¹⁵⁾ 「高齢者から世話を受けた経験がある者」¹¹⁾ ¹⁴⁾ ¹⁶⁾ にエイジズムの傾向が弱かったことが報告されている。これらのことから、高齢者の知識の深さや優しさに触れる経験から、高齢者に親しみを感じることができ、エイジズムが弱い傾向となっていることが推察される。一方で、「高齢者の世話をした経験がある」については、エイジズムが弱い傾向¹⁴⁾ と、エイジズムが強い傾向¹⁶⁾ の相反する報告が確認された。さらに、高齢者の世話をしたことのある経験がありエイジズムが強い傾向を示した者は、加齢に関する知識も高い傾向¹⁶⁾ を示していたことが報告されていることから、高齢者の世話をしたことで知識を高める一方で、高齢者の低下する身体的機能の理解への偏りや介護負担など、健康障害の否定的な側面に意識が向けられることでエイジズムが強くなることが考えられる。

【加齢変化に関する知識】については、「加齢に関する知識が乏しい」¹⁸⁾ とエイジズムが強いことが報告された。加齢に伴う知識について、身体的側面だけでなく、心理的、社会的側面からも理解を広げることが望ましいと考える。

介入前後の比較による研究結果では、「高齢者とのふれあい交流」¹⁹⁾ 「健康高齢者へのライフインタビュー」²⁰⁾ の前後で差があり、インタビュー後に「誹謗」や「回避」が軽減していることが報告されていた。交流やインタビューの中で、高齢者の生きてきた歴史を通し、加齢に伴う様々な喪失体験を経験しながら、それらを受け入れ、順応し、日々の暮らし中に幸せを見出し生活している姿を感じられたことで、エイジズムの改善につながったと考えられる。このことから、高齢者の結晶性能力に触れること、心理社会的側面の理解が高齢者の強みの理解につながり、エイジズムの改善につながる可能性が示唆された。

先行研究でのライフインタビューやふれあい交流の高齢者は、健康高齢者との交流であった。健康高齢者との交流は、高齢者理解をポジティブにし理想とする高齢者像が築かれると考える。先行研究では、

理想の高齢者像と現実 접촉する高齢者にギャップが生じる際に、現実接触する高齢者に対する暴言が増えることが報告されている²¹⁾ ことから、健康高齢者を通してのポジティブな理解を促進するだけでは、障がいや疾病を持ち、介護を受けながら生活する高齢者に対する偏見や差別を強める可能性もあることを考えなければならない。

そのような高齢者の理解の視点として、「生活-人生」に関連した理解によりエイジズムの改善が見られた²²⁾ ことから、介護を必要とする高齢者に対し、高齢者の一人の人生や生活やその人の歩んできた歴史を知り、その人個人の理解を深めることが重要であると考え。今後も、介護を必要とする高齢者の理解の仕方を検討していくことが課題と考える。

また、学生の実習体験として「受け持ち患者から拒否される場面があった学生」の「誹謗」が高かった²³⁾ ことから、そのような体験をした学生に対する教育的な役割として、学生が、「拒否される理由」を患者の立場から理解し建設的な意味付けができるよう意図的に関わる必要があると考える。

3. エイジズムと看護実践の関連

一般病棟の看護師のエイジズムと身体拘束を必要とする認識が関連することが報告されていた²⁴⁾。この研究は横断的研究であるため、エイジズムが要因となって身体拘束を必要とする認識が高まるリスクがあるといえるか、その因果関係は不明である。一般病棟において4人に1人の高齢者が身体拘束をされていることが報告されており、そうした臨床に勤務することによって身体拘束される高齢者と接する中で、身体拘束に対する慣れが生じ、高齢者の認知機能や身体機能の低下に意識が向くようになり、エイジズムが強くなる可能性も考えなければならない。このことから、臨床の専門職のエイジズムの実態や実践との関連を明らかにし、研究を積み重ねることが課題と考える。

4. 研究における課題

13件中8件が学生を対象にしており、看護職を対象とした研究は1件と、エイジズムに関する研究の蓄積は充分とは言えない。また、高齢者を世話した経験のある者にエイジズムが強い傾向が示された研究結果もあった¹⁶⁾ ことから、障がいや疾病を抱え生活する高齢者と接する専門職は、高齢者に対する問題志向の視点が強化され、エイジズムにも影響

があると考えられる。今後は、高齢者に直接かわる専門職のエイジズムの実態や関連因子も明らかにしていく必要がある。

研究方法について、実態調査と関係探索研究が中心で、縦断的にエイジズムが影響を及ぼす因子を明らかにする研究や介入研究が少ないのが現状である。そのため、縦断的に取り組みエイジズムに関する因果関係を明らかにしていく必要があると考える。

VI. 結論

FSA を用いたエイジズムに関する研究の 13 件の文献検討から、高齢者との交流を通して、高齢者の生活体験や人生、その人の歴史に触れ、心理社会的な理解が深められることでエイジズムを軽減する可能性が示唆された。また、エイジズムと「高齢者との同居」や「高齢者を世話した体験」の関連について、同居や体験の有無ではなく、「その体験がどのように意味づけられているか」が関連してくると考えられた。

今後の課題として、研究対象者を、学生だけでなく医療・介護専門職に広げること、研究方法は、縦断研究にも取り組み因果関係やエイジズムが高齢者ケアに及ぼす影響を明らかにすることが求められる。

引用・参考文献

- 1) Butler RN (1995). Ageism. In the encyclopedia of ageing. 2nd ed., ed. by Maddox GL, 35-36.
- 2) Butler RN (1969). Age-ism, Another form of bigotry., Gerontologist, 9, 243-246.
- 3) 高崎絹子：実践から学ぶ高齢者虐待の対応と予防, 25, 日本看護協会出版会, 2010.
- 4) 原田謙, 杉澤秀博, 杉原陽子ほか：日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成 - 都市部の若年男性におけるエイジズムの測定 -, 老年社会科学, 26 巻 3 号, 308-319, 2004
- 5) 中谷陽明：児童の老人観；老人観スケールによる測定と要因分析, 社会老年学, 34 号, 13-22, 1991.
- 6) 保坂久美子, 袖井孝子：大学生の老人イメージ；SD 法による分析, 社会老年学, 27 号, 22-33, 1991
- 7) 石倉花奈子, 古城幸子：看護学生の高齢者イメージとエイジズムに関連する横断的調査, インターナショナル Nursing Care Research, 10 巻 3 号, 119-127, 2012.
- 8) Fraboni M, Saltstone R, Hughes S：The fraboni scale of ageism (FSA)；An attempt at a more precise measure of ageism., Canadian Journal on Aging, 9 (1), 55-66, 1990
- 9) 安部陽子：看護研究のための文献レビュー マトリックス方式, 73-96, 医学書院, 2012.
- 10) Palmore E.B (1999). Ageism. Negative and positive. 2nd ed., New York.
- 11) 坂井智明：スポーツ健康学系大学生が抱く高齢者のイメージ, 奈戸谷学院大学論集 医学・健康科学・スポーツ学科篇, 7 巻 1 号, 1-9, 2018.
- 12) 吉田浩二, 辻麻由美, 原田文子, 他：看護学生のエイジズムに関する研究, 保健学研究, 30 巻, 39-46, 2017.
- 13) 石井国雄, 田戸岡好香：感染症脅威が日本における高齢者偏見に及ぼす影響の検討, 心理学研究, 86 巻 3 号, 240-248, 2015.
- 14) 林綾乃, 會田信子, 杉浦伸一：第 1 学年と第 2 学年の比較による看護学生の高齢者に対するイメージと知識・理解、コミュニケーションの特徴, 日本看護医療学会雑誌, 13 巻 2 号, 45-55, 2011.
- 15) 村田日出子, 小野田真弓, 高野真由美：看護学生のエイジズムに関する要因 老年看護学概論および実習前後のエイジズムの変化, 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 4 号, 12-17, 2008.
- 16) 高野真由美：看護学生の背景による老人イメージ, 知識, エイジズムの相違 FAQ,FSA,SD 法を用いての分析, 日本看護学会論文集：看護教育, 38 号, 147-179, 2008.
- 17) 久木原博子, 内山久美, 二重作清子, 他：青年期にある人のエイジズムに関連する要因, 看護・保険科学研究誌, 13 巻 1 号, 57-64, 2013.
- 18) 原田謙, 杉澤秀博, 柴田博：都市部の若年男性におけるエイジズムに関連する要因, 老年社会科学, 29 巻 4 号, 485-492, 2008.
- 19) 森幸弘, 福田峰子, 松田武美：看護大学生の高齢者に対するエイジズムとイメージの変化 チャレンジサイト活動による高齢者とのふれあい交流から, 中部大学生命健康科学研究所紀要, 13 巻, 81-88, 2017.
- 20) 蓑原文子, 畑野相子, 岡美登里：ライフインタ

- ビュー体験の共有がもたらす効果, 高齢者イメージとエイジズムの観点からの考察, 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 13 巻 1 号, 43-46, 2015.
- 21) 大村壮:特別養護老人ホーム職員の高齢者イメージのずれが施設内老人虐待に与える影響, 心理学研究, 81 巻 4 号, 406-412, 2010.
- 22) 蓑原文子, 畑野相子:高齢者理解を目的としたライフインタビューの効果 エイジズムをアウトカムとした学びの分析, 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 12 巻 1 号, 27-30, 2014.
- 23) 森幸弘, 福田峰子, 飯森茂子, 他:看護学生のエイジズムと、生活背景・老年看護学臨地実習における体験との関連, 日本ヒューマンヘルスケア学会誌, 2 巻 1 号, 35-44, 2017.
- 24) 森野美由紀, 平田弘美:一般病棟における看護師の教育背景と高齢患者への身体拘束に対する認識との関係, 人間看護学研究, 16 号, 27-34, 2018.

Review of literature about factor of the ageism concerned.

CHINO Kumi

key words: Ageism Review of literature